025

After Century

Art Campus

Photography
Cinema
Fine Arts
Music
Literary Arts
Theatre
Broadcasting
Design

創設90周年
記念舞劇

「竹取物語――平成江古田傾奇念仏講」のこと

芸術学部の90周年記念行事として、昨年11月22日、江古田校舎中庭にて舞劇「竹取物語――平成江古田傾奇念仏講」を上演した。寒中の宵、灯りをおとした校舎の谷間に篝火が焚かれ、王朝時代を思わせる華やかで、しかしどこか物悲しい舞姫たちの舞劇が三百人を超す観客を魅了した。

ところで、「竹取」のことを書くのは、とても難しい。門外漢ながら企画者として関わった私としては、本当なら8学科すべての関係者一人一人にお礼を言うだけで終わってしまいそうだからだ。舞劇を舞った日舞の卒業生や学生は言うまでもなく、8学科すべてがこれほどまで密に関わり、協力し合って作ったイベントは今までなかったのではないか。

「8つのアート、1つのハート」と私たちはいうが、実際これはとても難しいことだ。はっきり言えば、「密に関わり、協力し合う」なんていう生易しいものではない。一夜の夢幻劇を作り上げるために、アーティストの8つのアートは互いに他のアートを打ち消しあい、己のハートを見失うまいと必死なのだ。当然、水面下で火花が飛び散る。イベントは分裂しそうになる。そして一人一人自分の楽屋や研究室に戻ればどんなに楽だろうと考え始める。ところが、もう帰れないのだ。イベントは進んでゆく。誰かが脱落しようとお構いなしに、本番の日が近づいてくる。「やれやれ」とつぶやき、「1つのハート」なるものがあるのだろうかと思いつつ重い腰を挙げる。そして、リハーサルの舞台に戻る。するとそこには無言で働いているスタッフの姿がある。口は出さずに、手を動かしてイベントを運んでいる人たちがいる。きっと、いままでもこういう人たちが、芸術学部の伝統をアトラスのように支えてきたに違いない。

アーティストたちは、華やかな舞台に立ち脚光と賞賛を浴びる。アーティストは確かに花である。だから、花は舞台上で絢爛と咲き乱れる方がよい。だが、アーティストは必死になれば必死になるほど、イベントの制約から解放されたいと感じる。自由になればもっと美しく咲けるのにと。しかし、そう感じたとき、舞台が動き始める。スタッフの働きが、アーティストの夢を現実に連れ戻す。花は咲くために、イベントという終わりある時間の中に存在しなければならない。スタッフの手仕事がチラシを刷り、舞台を組み立て、照明の調光や音合わせを始める。始まりの鉦が打ち鳴らされる。そして、舞姫たちは夢から醒め、見たこともないような美しい舞を舞い始める。

「1つのハート」はこんな風にこそ作られるものなのではないのか。幻灯のように遠くで輝き続けている「竹取」のことを振り返ると、そんなことがつい頭に浮かんでくる。

文芸学科 教授　上田 薫

今、自分にできること。

揺るがずに、信じたものを創り続ける。
背伸びをせずに、好きなものを追いかける。
自分にできることを、力の限り。
刻んできた汗や努力は、きっと明日の糧になる。

『ライトノベル』の世界に生きる。

文芸学科 4年

御永真幸（みながさなゆき）さん

■人生を変えた一冊の本

集英社コバルト文庫2010年度ノベル大賞で『ただここに降りしきるもの』が佳作に選ばれ、コバルト文庫から『無音の哀戀歌 ～さようなら、わたしの最愛～』でデビュー。2011年12月1日に最新作『ひなひめ御指南!』(コバルト文庫)を上梓。御永真幸は大学生でありながら、いわゆるライトノベルのジャンルでデビューを果たした作家である。

御永真幸の受賞作『無音の哀戀歌 ～さようなら、わたしの最愛～』と、最新作の『ひなひめ御指南!』。まだ作家としてスタートしたばかりだが、「これからもずっと書き続けたい」と彼女は言う。

多くの作家がそうであるように、御永もまた幼い頃から本を読むことが好きだった。夢中になって読んだのは歴史物である。歴史漫画にはじまり、偉人の伝記に興味が広がり、小学校の頃から平家物語や源氏物語を読むまでになった。そんな御永がライトノベルと出会ったのは、中学に入ってから。学校の図書館でふと手にした一冊の本が、御永をエンターテインメントの世界に導いたのである。

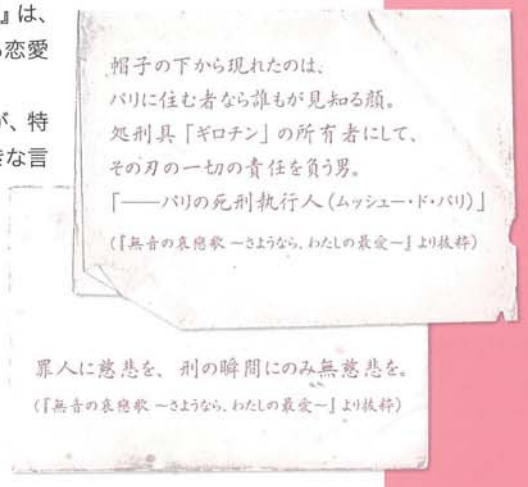
「こんな世界もあるのかと衝撃を受けました。ライトノベルは文章と絵で構成されているので、絵を描くことも好きだった私にとって理想型でした。内容も魔法や恋愛、歴史まで幅広く、飽きずに読めましたね」。当時、ハリー・ポッターなどの外国文学の台頭期。同年代の若者が主人公となって活躍するライトノベルに、彼女はどんどんのめり込んでいった。

■読み手から書き手へ

御永がコバルト文庫のノベル大賞に応募しはじめたのは、高校2年の時。「同い年の真朝ユヅキさんが受賞し、デビューしたことを知って奮起した」と、当時を振り返る。ライトノベルに魅了され、多くの作品を読んできた御永の中には、"いつか自分も作家になりたい"という思いがあった。「日芸ではライトノベルが専門の先生がいたので、授業では応募作品をずっと書いていました。同時にライトノベルの好きな15人の仲間とともに"軽文学及び周辺メディア研究会"というサークルを立ち上げ、お互いの作品を批評し合うなどの活動もしていました」。

中編と長編、年2回の応募を続けていた御永が、念願のノベル大賞を受賞したのは大学2年の時。受賞作『無音の哀戀歌 ～さようなら、わたしの最愛～』は、フランス革命期の処刑人を主人公にした悲恋で、実話をもとに書き上げた壮大なストーリーだ。この作品でデビューを果たした御永の二作目『ひなひめ御指南!』は、江戸時代を舞台にお姫様と幼なじみが繰り広げる恋愛物。デビュー作とはまったく異なる内容である。

『御永真幸』はペンネーム。「男性かと聞かれますが、特に意識してつけたわけではない」とか。彼女が好きな言葉は"人生って素晴らしい"。このペンネームにも、ずっと幸せにという思いが込められている。作家としての御永はまずキャラクターを考え、そこからストーリーをふくらませていくタイプ。読み手から書き手に見事な転身を遂げた彼女は、『御永真幸』というキャラクターに、どんなストーリーを描かせるのだろうか。


帽子の下から現れたのは、
パリに住む者なら誰もが見知る顔。
処刑具「ギロチン」の所有者にして、
その刃の一切の責任を負う男。
「――パリの死刑執行人（ムッシュー・ド・パリ）」
（『無音の哀戀歌 ～さようなら、わたしの最愛～』より抜粋）

罪人に慈悲を、刑の瞬間にのみ無慈悲を。
（『無音の哀戀歌 ～さようなら、わたしの最愛～』より抜粋）

■ライトノベルの『今』を見つめて

「ライトノベルの作家はサービス業」と彼女は言う。なぜなら、読者が好む物語を書くことが求められるからである。御永が10代の頃は、ライトノベルの読者層は10代が中心だったが、現在は20代半ばと年齢が高くなった。それと同じように、読者が求めるストーリーの志向も時代よって変化してきた。

「現代の読者に好まれるのは、シンプルで夢のあるストーリーです。恋愛物ならシンデレラより美女と野獣。シンデレラのように苦労して幸せを掴むのではなく、美人でお金持ちの女の子が恋をして、最後はハッピーエンドで終わる……。不安定な時代だから、物語には夢や平和を求めているんですね。私が夢中になって読んでいた冒険ありのファンタジーな物語は、今はなかなか受け入れられない。自分が書きたいものを、時代の縛りのなかでどう小説に織り込んでいくのかが課題ですね」。

20年以上の歴史をもつライトノベルは、その時代その時代の若者たちを魅了し続けてきた。彼女が生きた時代のそれと、現代のそれは確かに違うかもしれないが、ライトノベルを通じて彼女が感じてきた夢や憧れにも似た気持ちは、現代の作家としてこの世界に生き続ける御永にとって最大の武器になるだろう。

信じてきたこの道を、一歩ずつ。

デザイン学科 建築デザインコース 4年

市橋正崇さん

■「木」の可能性に魅せられて

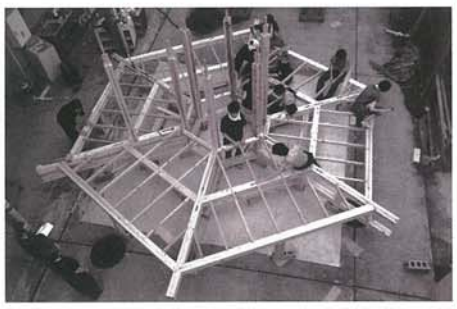
市橋正崇は4年間、変わることなく「木」と対峙してきた。彼が木にこだわり、木を使ったものづくりを続けてきたのは、そこにコンクリートや鉄など他の素材にはない表現力を見いだしたからである。「1つの材料で長い距離を渡す場合、コンクリートであれば簡単にできるし、いくらでも格好いいものができる。それに対して木は長い距離を渡そうとすると、多くの制約がある。その制約に対峙し、あらゆる選択肢の中から答えを導きだし、美しさと強度を両立したものを作らなければならない。時間もかかるし、難しさもありますが、それが何よりの魅力です」。

幼い頃から"解体すること"が好きだった。外からは見えない部分が見たくて、不要になったラジオや照明などを次から次に解体した。その時、彼の頭の中にあったのは"中はどうなっているんだろう"というわくわくした気持ち。その気持ちは今、木組を使ったものづくりに息づいている。つくるための制約が多い木という素材をどう生かすか。どうやって組めば、強度をより高めることができるか。「完成した時のかたちを考えながらつくっていくことが、これほどおもしろいとは思わなかった」。そう語る市橋の瞳は、子供のように輝いていた。

■支えてくれた人たちに感謝

2年前期の課題として制作した『市中の山居　縁』、木材をパズルのように組み合わせたテーブル『楗(かぎ)』、卒業制作作品である『棲(すみか)』。市橋はこれまで数多く現寸の作品をつくってきた。その原点ともいえる『市中の山居　縁』は、町中に居ながらにして山中の風情を味わえる憩いの空間。多くの方々の協力を得てつくりあげた大作である。

徳島の杉材を使用した『市中の山居　縁』は今、徳島県の吉野川市アメニティセンターの敷地内に置かれ、市民の憩いの場として活用されている。「これからも、多くの人に使ってもらえるものづくりをしたいですね」。



「仲間の協力がなければ、作品は完成しなかった」と市橋は言う。大学生活で、人のつながりの大切さを学んだ。

20分の1、5分の1の模型をつくり、その都度問題点を検討。表出した問題点に改善を加えながら、いよいよ現寸制作へ。彼の手による設計図、平面図を基に、徳島から取り寄せた巨大な杉材にスミツケし、木を刻んで部材をつくり、100を優に超える部材を組む作業は、朝早くから夜遅くまで続けられた。完成までに要した時間は約1年半。時間を割いて、多くの仲間たちが力を貸してくれた。「制作は山登りのようでした。当初は山の全貌が見えませんでしたが、あたたかく見守ってくださった深谷先生をはじめたくさんの方々に支えられ、一歩一歩登り続けた結果、自分を見失うことなくこの山を登り切ることができました」。

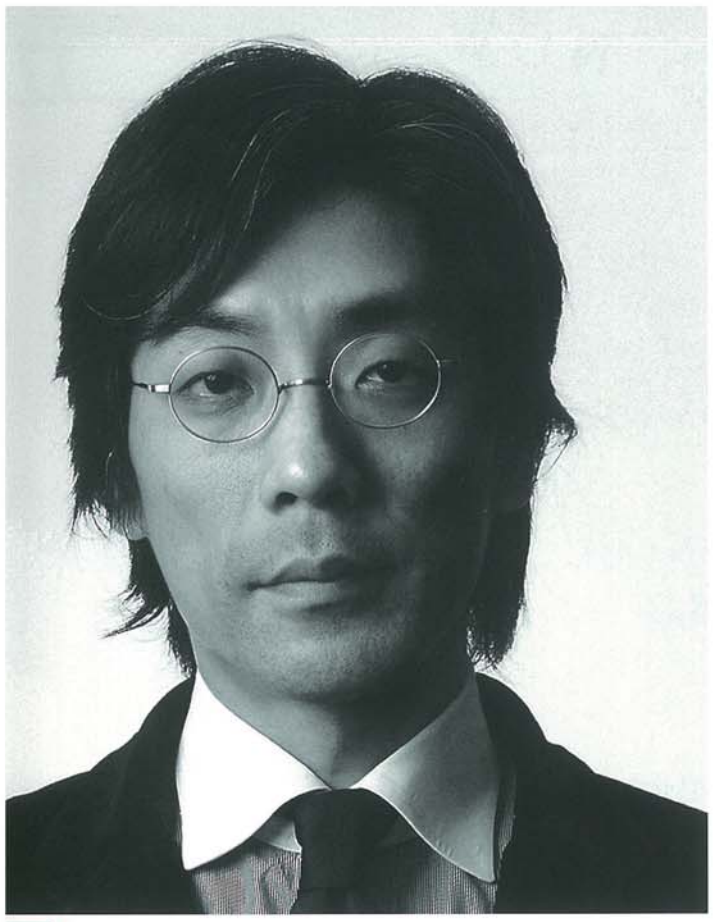
■組木という手法を極める

制作という市橋の山登りは、決して平坦だったわけではない。そこには苦悩もあった。「卒業制作にとりかかる時、これまでやってきた木の経験を活かした制作にするか、新たなモノにチャレンジするか悩みました。コンクリートや鉄の作品は自由な設計がしやすく、見栄えもよい。しかし、今まで多くの方に支えられ、積み上げてきた経験を活かす事こそ卒業制作としてふさわしいと思い、木を使い制作する事を決めました」。そんな思いを経て完成したのが『棲』である。

『棲』は2m30cmのキューブのような木枠で、そこに壁やベッド、棚などを取り付けることにより、自分だけの住空間をつくることができる。たとえばマンションの一室に置くだけで子供部屋にもなり、書斎にもなり、引っ越す時はキューブごと移動すれば、どこに行っても住み慣れた空間をそのまま使うことができるというものである。市橋は大学生活の集大成といえるこの作品で、卒業制作の一位を獲った。「悩んだこともありましたが、結果的には木という一つの素材に対峙し続けたことが良かったと思っています」。

市橋は、これからも新たな作品に全力で挑み続ける。"経験"と"知識"という自分の中の木組を、一つひとつ積み上げていくために。

▶卒業制作作品『棲』。住空間の常識に新たな光を注いだこの作品は、すべての作品の中から一位に選ばれた。二位を獲得したのは、入学以来ライバルとして競ってきた親友。二人で一位、二位を獲れたことを喜び合ったという。



第6回日藝賞は、松井龍哉氏と船越英一郎氏に決定!

Tatsuya Matsui

日本大学芸術学部美術学科 VCデザインコース(平成2年度卒業) ロボットデザイナー

松井龍哉

【略歴】

1991年- 丹下健三・都市・建築・設計研究所を経て渡仏。
1999年 科学技術振興事業団 北野共生システムプロジェクトにて
ヒューマノイドロボット「SIG」「PINO」などのデザインに携わる。
2001年 フラワー・ロボティクス社を設立。
ヒューマノイドロボット「Posy」「P-noir」や「Platina」等開発。
2006年- 公益財団法人日本デザイン振興会主催グッドデザインGマーク審査員。
2009年- マネキン型ロボット「Palette」「U.T.Palette」を自社開発、自社販売開始。

【代表作品】

◉ロボット

PINO
ニューヨーク近代美術館特別企画展
ベネチアビエンナーレ国際建築展出展
宇多田ヒカル「Can You Keep A Secret?」PV出演

Posy
全日空キャンペーンキャラクター
ルイ・ヴィトン、ゲラン、バカラ、オメガ等のイベントに多数出演
愛・地球博名古屋商工会議所パビリオンに出展
ソフィアコッポラ監督の映画「Lost in translation」出演(ディレクターズカット)
ゆず「Hey和」PV出演
2016年東京オリンピック招致の国際プレゼンテーションに出演
外務省(在香港日本国総領事館)主催 香港における「元気な日本」展 出演

Palette
東京表参道のルイ・ヴィトンや新宿伊勢丹のショーウインドや
世界各地の展示会にて使われている。

U.T.Palette
Parisルーブル装飾美術館にて行われた感性JapanDesign Exhibitino
に出展の他、銀座の和光など各地で展示。

Polaris
KDDI社「iida」の携帯電話+ロボットのコンセプトモデルを開発

◉ロボットの他

航空会社スターフライヤーのトータルデザイン
ダンヒル銀座本店 香港店 店舗設計
北陸銀行東京渋谷支店店舗設計
コクヨのプロダクトブランドTrystramsより「X-VIZ」シリーズをデザイン
サントリーウイスキー「山崎」特別ギフトパッケージデザイン

【受賞歴】

公益財団法人日本デザイン振興会 グットデザイン賞(2000年、2006年、2009年)
Industrie Forum Design Hannover(ドイツ) iFデザイン賞(2010年、2011年、2012年)
46th ACC CM Festival ACCブロンズ賞(2006年)

【展覧会】

「松井龍哉展 Flower Robotics」(2006年11月～2007年1月/水戸芸術館)

N·I·C·H
AWARD FOR

第6回 日藝

日藝賞とは、芸術学部に在籍していた人で、著しく日藝の名声を高め、その業績が社会に貢献し、芸術を志す学生の夢の対象となる人に贈られます。第6回日藝賞は、2011年11月7日から25日まで、学生、教職員、芸術学部校友会役員の投票により選出された候補者の中から、日藝賞選考委

第3回 爆笑問題(太田光、田中裕二/タレント)
宮藤官九郎(脚本家)
真田広之(俳優)

第4回 宮嶋茂樹(報道カメラマン)
市川團十郎(歌舞伎俳優)

第5回 青山剛昌(漫画家)
林 真理子(小説家)

船越英一郎

【主な出演作品】

◉TV◉

父の恋人 | 日曜劇場／1982年デビュー TBS
うちの嫁さんどっちむいてブイ CX
気分は、名探偵 NTV
刑事物語'85 NTV
ノンちゃんの夢 | 朝の連続テレビ小説 NHK
八百八町夢日記 NTV
次郎長三国志 | 12時間超ワイドドラマ TX
「小京都ミステリー」シリーズ 火曜サスペンス劇場 NTV
船長シリーズ | 土曜ワイド劇場 ANB
京都地検の女 ANB
マンハッタンラブストーリー TBS
黒の回廊 | 松本清張スペシャル NTV
愛情イッポン NTV
たったひとつのたからもの NTV
アタックNo.1 EX
赤い運命 TBS
渡る世間は鬼ばかり TBS
手の上のシャボン玉 NTV
☆その男、副署長～京都河原町署事件ファイル EX
☆その男、副署長2～京都河原町署事件ファイル EX
☆その男、副署長3 EX
ジャングル大帝 | アニメ／トト役 CX
官僚たちの夏 | 日曜劇場 TBS
逃亡弁護士 CX
熱中時代 NTV
☆ホンボシ～心理捜査事件簿～ EX
悪女たちのメス | 金曜プレステージ CX
☆箱根湯河原温泉交番シリーズ | 火曜サスペンス劇場 NTV
早海さんと呼ばれる日 | 連続ドラマ CX

◉映画

もうひとつの少年 | 1984年／監督：磯野鐵太郎
国東物語 | 1984年／監督：石山昭信
パチンコ物語 | 松竹／1990年／監督：辻 理
ひっとべ | テヒートフィルム／2001年
夢追いかけて | 2002年／監督：花堂純次
手紙 | 2003年／監督：松尾昭典
ドラえもん のび太の恐竜 2006 | 2006年／アニメ声優初出演
「涙そうそう」「木更津キャッツアイ ワールドシリーズ」| 2006年
☆おばちゃんチップス〈主演〉| 2007年／監督：田中 誠
LOVE DEATH | 渋谷Q-AXほか／2007年5月公開／監督：北村龍平
☆マリと子犬の物語〈主演〉| 全国東宝系／2007年12月8日公開／監督：猪股隆一
☆ウルルの森の物語 | 全国東宝系／2009年12月19日公開／監督：長沼 誠
誘拐ラブソディー | 角川映画／2010年4月3日公開／監督：榊英雄
白夜行 | ギャガ／2011年1月29日公開／監督：深川栄洋
LIAR GAME—再生— | 全国東宝系／2012年3月3日公開／監督：松山博昭

☆は主演作品

【現在のレギュラー】

◉2時間ドラマ

☆「捜し屋★諸星光介が走る!」シリーズ〈主演〉| 月曜ゴールデン TBS
☆「狩矢警部」シリーズ〈主演〉| 月曜ゴールデン TBS
☆「外科医 鳩村周五郎」シリーズ〈主演〉| 金曜プレステージ CX
☆「所轄刑事」シリーズ〈主演〉| 金曜プレステージ CX
☆「火災調査官・紅蓮次郎」シリーズ〈主演〉| 土曜ワイド劇場 EX
☆「新 船長の航海事件日誌」シリーズ〈主演〉| 土曜ワイド劇場 EX
☆「刑事吉永誠一 涙の事件簿」シリーズ〈主演〉| 水曜ミステリー9 TX

◉TV

☆ソロモン流 | 毎週日曜 21:54～／番組案内人 TX

【MC番組】

江原啓之・天国からの手紙SP | 司会 CX
夢の音楽舎 | 司会 NTV
第37回 思い出のメロディー | 2005年8月ステージショー初司会 NHK
体育の時間 | 番組MC EX
世界の絶景100選 CX
人体再生ロマンSP | 番組ナビゲーター CX

【CM】

(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ
八幡物産株式会社—インフォマーシャル

【雑誌連載】

船越英一郎の私的サスペンス劇場 | 月刊テレビジャパン／東京ニュース通信社

【PV】

告白／FUNKY MONKY BABYS | ジャケットにも起用

その他多数出演

I・G・E・I
EXCELLENCE
賞

員会で業績などを検討の結果、松井龍哉氏（平成2年度美術学科卒業・ロボットデザイナー）と船越英一郎氏（昭和57年度映画学科卒業・俳優）に決定しました。授賞式は2012年4月8日の入学歓迎式の中で行われ、2名の受賞者にはそれぞれ賞金とバカラクリスタルの記念トロフィーが授与されます。

【歴代受賞者】

第1回 三谷幸喜（脚本家）
佐藤隆太（俳優）
第2回 大石芳野（ドキュメンタリー写真家）

Eiichiro Funakoshi

日本大学芸術学部映画学科（昭和57年度卒業） 俳優

SEISHUNの君たちへ

なぜ、本を読んでも賢くならないのか？

近藤サト ○放送学科 平成3年卒 特任教授

もしかして皆さんは、親や先生に「本を読め！ 賢くなれ！」と言われ続けて本を読み過ぎていませんか？
かの西郷隆盛が愛読した生き方指南書『言志四録』の著者で江戸の儒学者、佐藤一斎も「若いころにずいぶん本を読んだけど、ほとんど忘れちゃったよ！ ああ、貴重な時間を無駄にしたなあ。」と言っています。偉人でもこんなもんです。多読は無読とも言えるのです。
じゃあ、全く読まなくてもいいかというとそうではなく、よく選んで精読しましょうということです。
私は、学生に朗読を教えていますが朗読は精読の最たるものではないでしょうか。実際の例を挙げて説明しましょう。
森鴎外『高瀬舟』の冒頭の一節から。
「いつの頃であったか。多分江戸で白河楽翁侯が政柄を執っていた寛政の頃ででもあっただろう。知恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。」
いや～、ほれぼれするような文章に出会った時の感動は朗読者冥利ですね。さてこの文章を音声にするとおよそ30秒。これを一応「仕込む」とすると小一時間はかかります。アクセントや抑揚などの技術は微に入り細に入り。でもその前に文章の意味を理解していないといけませんから、松平定信の寛政の改革から、知恩院の鐘の音まで調べてもらいます。なんなら高瀬川で流れて来い！ とも。
だってどんなに朗々と偉そうに朗読しても解ってないと説得力がないのです。
だから取材も含めるとかなりの時間と労力が必要になります。事実、まじめに（!）
授業を受けた学生さんはしんどくて肩で息をしています（苦笑）。
なんでそこまでやるのか？ って？ それが芸術だからです。芸術は誰が何と言おうと尽き詰めて突き詰めて突き抜けた瞬間に見えるものではないでしょうか。
本の話に戻しましょう。そうまでして精読（朗読も！）した本は一生忘れられませんし、糧になります。読書は本来、それを心に刻みつけて生涯活用することが大切なのです。だからむやみに読まないで下さいということです（笑）。
それから、桜散る知恩院の入相の鐘。
これは森鴎外に興味のない人も是非体験してみてください。いにしえの遺伝子がふるえる天下の絶景です！ いざ京都へ。
佐藤一斎はこうも言っています。「心を以って字無きの書を読むべし。」心の眼（心眼）を開いて無字の書、つまり社会生活で起こるいろんな事の中からも真理を読みとって会得しなさいということです。
フェイスブックやツイッターもいい道具です。
でも、本を読まないことを恥じるより、文字に支配されることのほうを恥ずべき時代なのかもしれませんね。

入学した皆さんに言いたいこと

冨井大裕 ○美術学科 助教

正直に言うと、これから日芸に入ってくる皆さんに対して、ここで何を言ったら良いのか困っています。希望を持って入学して貰いたいし、実際に希望を持って入学されてくると思います。不安や緊張もあるでしょう。わからないことだらけだと思います。当然です。私は、そんな皆さんに対して、「充実した時間を過ごしてほしい」とか「かけがえのない時間を大切に」とか言うことができません。何故なら、皆さんはこれから絶対に「充実した時間を過ごす」はずだし、「かけがえのない時間」は大学生活に限らず、全ての時間がそうだからです。きっとこんなことは皆さんも承知でしょう。考えていけばいくほど何を言っていいのか困ってしまいます。それでも何かを言わねばならないこの状況で一つだけ頭に浮かんだことがあります。それは、「当たり前のことを当たり前と思わないこと」。
大学に入ったばかりの現在は、全 てのものが新鮮に映っていることでしょう。様々なことやものが気になって、何事にも取りあえずはチャレンジするでしょう。それからしばらくして色々な事情がわかり、冷静に周りが見えるようになって、やりたいことも絞られていきます。そうでなくてはいけません。ただ、そうは言いながらも、ここに私は不安を感じています。「当たり前のことを当たり前としてしか感じなくなってしまうのではないか？」と。
環境に慣れることで、私たちはその環境を受け入れ、目の前のことを当たり前のこととして捉えるようになります。入学当初はあったはずの、見えるもの全てに反応する新鮮な感覚は失われていきます。これは仕方のないことであると同時に、とても危険なことです。当たり前のことは当たり前にあることではないからです。私たちの目の前にある全てのことやものは、何らかの理由や意味があって、多くの人が関わり、長い研鑽の結果、当たり前のような顔をして皆さんの前にあるだけなのです。当たり前のことは当たり前のことではない。このことへの意識を大学に慣れた時にこそ、失わずに持ち続けてほしい。紙幅が尽きました。私が皆さんに言いたいことはこんなことです。

コミュニケーションとはなんぞや

大谷尚子 ○映画学科 准教授

「コミュニケーション」という言葉を広辞苑で調べてみると、「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達」とある。つまり伝達することによって「意思の疎通」をはかるのである。
私は現在、福祉施設において言語聴覚士として言語指導を行っている。言語聴覚士はその名のとおり、「ことば」と「聴こえ」に何らかの問題を抱えている方に対しセラピーを行う専門職である。私がそこで担当しているのは知的障害を抱えた成人の利用者さんの訓練だ。知的障害といっても利用者さんにより異なり、言葉によるコミュニケーションを図ることが出来ない方から普通に会話をすることができる方まで様々である。ことばの訓練というと、発音の訓練をしたり、「あいうえお」から始める国語の授業のようなイメージを持たれるかもしれないが（時にはそのような訓練を行うこともあるが…）、実際に私がそこで行っているのは、「意思の疎通」をはかっていただけるようになるお手伝いをしている。
生まれたばかりの赤ちゃんは泣いて様々な要求や意思を母親などに知らせる。それがやがて母親などとの間で様々なやり取りが行われ、そのやり取りこそが意思を伝達する礎、いわばコミュニケーションの基礎となるのである。それをもとにことばも獲得されていく。私が担当している方の中には、やり取りがまだ獲得されていない利用者さんもいらっしゃり、彼らの要求、意思をはかることができないのはもちろんのこと、彼らも私たちに意思を伝えることができないのである。もし、皆さんが自分の意思や要求を他者に伝える手段を持たなかったとしたらどうだろうか？ 非常につらいことだろう。自分という人間を表現することができないのは本当につらいことだと思う。
コミュニケーションを考える時、いつも同時に思うのが「表現する」ということだ。自分の表現したいことを他者に向けて伝達する、それに触れた他者がその表現に対し何かを発信する＝コミュニケーションといえるのではないだろうか。様々な芸術分野で自己を表現したいと考えている皆さん、コミュニケーションを決して恐れずに他者に伝達していってほしいと思う。ただし「コミュニケーション＝やり取り」だということを忘れずに。

所沢校舎事務局の肥った“おばさん”より

清水浩子 ○所沢校舎庶務課長

日本大学芸術学部にお世話になってから速いもので37年の年月が流れてしまいました。二十歳で事務局職員になり，あっという間に皆さんのお母様お父様より年上になってしまいました。戦争も無く、学園紛争も無く、食糧危機も無く、大きな苦労もなく幸せな人生を送ってきたと思います。
学生のころは、ベビースターラーメン・マーブルチョコ等を食べながら友達とおしゃべりし、授業終了後は、出前のラーメンを食べながら夜遅くまで実習の準備をしたことを思い出します。常に何かを美味しく食べ、幸せを実感している単純な私でした。
でもこの頃はちょっと心配事ができました。若いころは何を食べても、そしてどんなに食べても肥らず、思いっきり食べることができたのに、最近は、顔が丸くなり、お腹周りが大きくなり、周りの人には、成長しすぎと言われ、久しぶりに会った人には別人と思われ、無視をされ、ガックリ。スポーツジムに通い始めたものの、3年がたち成果なし。面倒なことが嫌いな私は、会費は納めてはいるものの、3か月間自主休講、ますます成長しています。「コレステロールは少しなら多い方が長生きをする」と聞いたとたん、少しぐらいなら大きくなってもいいかな、食べることの幸せは捨ててはいけないな、と勝手に思い込み、心配事はどこへやら。ステーキ、しゃぶしゃぶ、お寿司、すき焼き、懐石料理…と、幸せを追求する毎日です。どんなことがあっても、美味しく食べることができるよう、日々精神を鍛えようと頑張っています。そして、少々のことなら、どっしり構えられるようになりました。
人生いろいろと苦難な道があるかと思います。でも、考え方を少し変えることによって、人生の方向も変わることがあると思います。皆さんも苦難に立ち向かい心が折れそうになったら、是非自分の都合のよいように考え、前向きに人生を過ごしてください。そして美味しいものを思いっきり食べましょう。きっと良いことが舞い降りてくると思います。食いしん坊の“おばさん”を見習ってどんどん成長してください。そして、大きくなってくださいね。

1つのハート

芸術学部創設90周年記念事業

創設90周年記念式典・祝賀会

創設90周年記念式典・祝賀会は、平成23年11月19日、都内のホテルにて、田中英壽理事長、大塚吉兵衛総長をはじめ大学関係者、中国伝媒大学の蘇 志武学長他、多くの方々の臨席のもと開催されました。

創設90周年記念植樹

芸術学部創設90周年記念事業の一環で、植樹祭を行い記念樹としてクスノキを中庭に植えました。何故、クスノキにしたかと言いますと、理由は常緑樹で枝張りが良く、生命力が強い木なので、芸術学部も同様に力強く発展して欲しいとの願いからです。又、場所については中庭に緑が少ないことと、学生食堂の前だと多くの皆さんに、四季折々の違った雰囲気の緑が楽しめることからです。更にギャラリー棟側から見ますと木が通路の一直線上に見え、白い建物に木の緑が美しく映えると言うのが理由です。

将来的には、ハワイに有るコマーシャルで有名な「この木なんの木」の様なイメージの木になり、芸術学部のシンボルツリーとして学生、教職員の皆さんから愛される木になればと思っております。

——経理長　佐藤一哉

中国伝媒大学交流25周年記念講演会

——中国伝媒大学と日本大学芸術学部の25年の交流を振り返りつつ、さらなる友好と協力を確認——

2011年は、日本大学芸術学部創設90周年であると同時に、中国伝媒大学と本学部の交流25周年を記念する年でもあった。中国伝媒大学訪日代表団の方々に来校いただき、記念講演会（2011年11月21日、江古田校舎EB2教室）を開催し、蘇志武学長と曹璐教授が講演を行った。

まず、野田慶人芸術学部長の開会の挨拶、続いて中国伝媒大学訪日代表団メンバーを紹介。蘇志武（学長・訪日代表団長）、呉延熊（学長補佐）、曹璐（テレビと新聞学院教授）、関玲（戯曲・映画・テレビ学院副院長）、彭文祥（学長室副主任）、張彩（テレビと新聞学院教授）、李立軍（外国語学院副教授）の諸先生方である。

続いて講演2本、ビデオ上映2本、質疑応答へと進んだ。

- 講演1「高等教育のグローバル化とコミュニケーション領域の人材育成」蘇志武（中国伝媒大学学長）（通訳：李立軍副教授）

蘇学長（1955年広西省桂林生まれ）の専門分野は、コミュニケーション技術専門領域の教学と研究及び高等教育の管理に関する研究。

学長は、高等教育における国際性と交流についての基本的な考え方とその展望を示し、コミュニケーションの緊急性、前提となる基礎領域の重要性、また日中の密接な交流のみならず東アジア文化圏そして国際化へと、芸術のプラットホームの共有に関して、模範や先駆けとなるべく中国伝媒大学の将来性を語った。

- ビデオ上映1「中国伝媒大学Communication University of China（CUC）」（英語版：上映時間14分）：中国伝媒大学の紹介ビデオ
- ビデオ上映2「朋友」（日本語・中国語版：上映時間18分）：両校の学生交流の様子を撮影したビデオ（撮影：陳文芷本学部元教授・現講師、編集協力：鈴木康弘放送学科教授、編集：参加学生）
- 講演2「21世紀に向けて、学問の海で共に舟を漕いでいこう」曹璐（中国伝媒大学テレビと新聞学院教授）（通訳：李立軍副教授）

曹教授（1959年中国人民大学新聞学科卒業）は、1988年、本学部と中国伝媒大学（当時の北京広播学院）両校の提携に関する覚書調印後、第1回交換教員として来日し講義され、2001年には中国伝媒大学（当時の北京広播学院）の代表団メンバーとして、芸術学部創設80周年記念活動に参加し国際シンポジウム「ITと芸術」において論文を発表。新聞系学科主任，広告学科主任、新聞研究所所長、新聞学院院長を歴任し、現在、中国伝媒大学テレビと新聞学院教授、博士課程指導教授、放送発展研究センター主任。

曹教授は、25周年への祝辞の後、懐かしい写真を交えながら両校の交流と協力の歴史を振り返った。土台作り、開拓期、実質的進展期、そして現在の国際化されたメディアと芸術の創出性のある人材育成とプラットホーム作りと、4つの発展段階とした。また同時に、25周年を迎えて、交流参加者の拡大（教員から学生参加へ）、内容面の拡大（授業から共同研究・出版・展示などへ）、協力・交流のプラットホームの国際化された方向への拡大（代表団派遣、交流の協定、シンポジウム・式典）といった3つの拡大として、「異なるが調和する前向きの発展」として現在を位置づけた。さらに、未来に向けて「メディアを足場に、社会を頼りに、世界を視野に」と提唱した。

質疑応答では、自前で準備した中日両国語による学生の熱心な質問に対して曹教授に加えて野田学部長からの丁寧な回答もあって、参加学生にとっても有意義な講演会であった。

そして最後に記念事業委員会委員長の上滝徹也教授の「謝辞」をもって閉会に至った。

中国伝媒大学と日本大学芸術学部の25年の交流の歩み、そして将来に向けての提言と、充実した内容、親密な雰囲気に包まれた講演会となり、両校の将来のさらなる友好と協力を確認して閉会した。

——美術学科教授　髙橋幸次

受賞者一覧

去る3月25日に平成23年度卒業式及び学位記授与式が挙行されました。日本大学総長賞・優等賞、芸術学部長賞、芸術学部奨励賞など卒業生、大学院修了生に対する各賞の発表及び表彰がありましたので、学外のコンテストなどで活躍された受賞者と併せてお知らせいたします。

◉日本大学総長賞

○学業部門

谷口光子（写真）

◉日本大学優等賞（学業部門）

遠藤真人、金 兌蘭、佐藤紀子、谷口光子（以上写真）
須藤清夏、秋山美帆、古川千春、申 東玉（以上映画）
西美樹子、鈴木有希子、伊藤みどり、吉原沙織（以上美術）
伊藤元成、田村華生、佐藤直哉、戸部愛未（以上音楽）
松永寛和、髙橋由衣、齋藤香織、古谷奈津子（以上文芸）
淡路玲子、中根百合香、庄司美星、田中愛理（以上演劇）
豊田大輔、秋田尭律、長澤 蘭、井上佳央里（以上放送）
千葉菜々子、片山拓人、赤塚 悠、日鼻 優（以上デザイン）

◉日本大学奨励賞（学術・文化部門）

長尾舞夢（演劇1年）

◉芸術学部長賞

○学業部門

遠藤真人、谷口光子、堀内慶太郎、川嶋謙吾、小山貴大（以上写真）
千葉佐記子、中村桃子、秋戸香澄、笠原慎太郎、大畠奈菜子（以上映画）
豊田佳菜子、橋川裕輔、田﨑彩音、船橋みふゆ（以上美術）
佐藤 圭、黒田 恵、山之内美和、藤原沙織、佐藤直哉（以上音楽）
尼﨑愛美、伊藤多季人、青木 瞳、御手洗紀穂、藤方玲衣（以上文芸）
村上友里恵、八幡みゆき、庄司美星、西野加奈子、佐伯将太（以上演劇）
小野真実、井上佳央里、黒田惟子、冨田奈央子、長吉優介（以上放送）
千葉菜々子、岡崎洋佑、鈴木勇波、市橋正崇、萩尾衛俊（以上デザイン）

○その他の部門

髙野和彰（文芸）、本郷 哲（放送）

◉芸術学部奨励賞

栗原小織（写真）、川元美季（映画）、猪狩千恵子（美術）、戸部愛未（音楽）、德原友里（文芸）、三簾萌実（演劇）、秋田尭律（放送）、野村友樹子（デザイン）

◉芸術学部金丸重嶺賞

堀 美由紀、酒井成美、西村 満（以上写真）

◉芸術学部渡辺俊平記念賞

島田康貴（映画）

◉芸術学部呉正恭賞（特別賞）

新井絵未梨、片桐隆行（放送）

◉芸術学部川野希典賞

近藤有佳（以上演劇）

◉芸術学部筈見有弘賞

松永理人（映画）

◉芸術学部大竹徹賞

増田芽以（映画）

◉芸術学部八木信忠賞

志摩賢太（映画）

◉芸術学部湯川制賞

大矢英貴（文芸学）、野村建太（映像芸術）、大橋朋美（造形芸術）、木村友美（音楽芸術）、KOBORI RAFAEL HISSASHI（舞台芸術）

◉芸術学部澤本徳美賞

粕谷 光（文芸学）、飯田ゆりあ（映像芸術）、金 男起（造形芸術）、榎本万里子（舞台芸術）

◉生産工学部賞

髙野さくら（造形芸術）、大谷佳乃子、小野まりの（以上美術）

◉文理学部長賞

橋本茉里、大橋朋美（以上造形芸術）

◉平成25年度「日本大学進学ガイド」

○表紙デザインの部
最優秀賞　外山里香（デザイン3年）
優秀賞　中川美沙（同3年）、樋口実季（同2年）
学務部長賞　増田貴明（同3年）

○メイン写真の部
最優秀賞　髙木美佑（写真2年）
優秀賞　長谷川真也（同2年）、大森憂綺（同2年）
学務部長賞　大橋絵莉花（同1年）

◉写真学科卒展2012

○新写真派協会賞

川嶋謙吾（写真）

○写真学科奨励賞

河野優太、小林さゆみ、若林朝恵（以上写真）

◉映画学科奨励賞

岡野 彩、山田智和、虻川慎輔、遠藤沙紀、村田圭佑、松山千紘、金子彩奈（以上映画）

◉映画学科選奨

二階堂峻、小久保晴太郎、八木拓磨、小白井俊樹、古川千春、金山はづき、牛島僚太（以上映画）

◉映画学科特別賞

木嶋友貴子、原 藍子、大杉磨耶、塙 芽衣、海部光一、矢野詩音、五十嵐千晃（以上映画）

◉アートライティング賞

武田浩明（映画）、齋藤健太郎（映画3年）

◉映画学科コダック賞

藤原拓海、横山裕香、荒木宏美、川澄さおり、ルローロックトマ賢策、厚木拓郎、呉 知啟（以上映画）、山崎真依子、池田千裕、鈴木陽平、丸山陽介、平野 礼、村松 良、星 潤哉（以上映画3年）

◉江戸クリエート賞

諸岡裕明、内田沙季、森野 好（以上映画3年）

◉第3回JPCAデザインアワード

準グランプリ　黒岩武史（デザイン3年）
優秀賞　永田泰佑（大学院1年）

◉AACポスターコンペティション2011

最優秀賞　藤平奈央子（デザイン2年）

◉MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2011

河原敏文賞（審査員賞）　髙森奈央子（デザインH22年度卒）

◉オレンジリボン運動公式ポスターコンテスト2011

SBI子ども希望財団賞　坂本実佳子（デザイン）

◉プロと卵のエコデザイン展2011 エコ・カクメイ

優秀賞　安藤結衣、池上 響（以上デザイン3年）
奨励賞　大津理沙、川村千明（以上同3年）

——以上（学年は23年度のもの／学年表記のないものは今春の卒業生）

写真学科

◉「日本大学芸術学部写真学科2012卒展」開催

写真学科卒業制作展が、2月17日～3月3日まで江古田校舎芸術資料館において開催されました。
初日にはオープニングレセプションも開催され、出展者の中から下記の優秀作品が選ばれました。

○新写真派協会賞
川嶋謙吾「A ROUND THE WORLD」
○写真学科奨励賞
河野優太「PLANT」／小林さゆみ「追随」
若林朝恵「Promised Land」

◉日本大学芸術学部写真学科・卒業制作選抜展

平成23年度卒業制作の中から選抜された下記作品が、2月23日～28日まで四谷のポートレートギャラリーで展示されました。
安達洋子「RECUEIL -garder/liberté-」／遠藤真人「煙道」
川嶋謙吾「A ROUND THE WORLD」
小山貴大「Je vous en prie」／酒井成美「Mimēsis」
堀内慶太郎「ツクヨミ」

◉平成23年度大学院映像芸術専攻修了制作展

平成23年度大学院映像芸術専攻（写真分野）修了制作展が、4月17日～5月18日まで江古田校舎芸術資料館において開催されますので、ぜひご覧ください。

◉平成23年度卒業・修了制作優秀作品展

平成23年度の卒業制作の中から下記優秀作品を5月から江古田校舎東棟写真ギャラリーで順次展示いたします。

○芸術学部長賞
遠藤真人「煙道」／谷口光子「うつくしきもの」
堀内慶太郎「ツクヨミ」／川嶋謙吾「A ROUND THE WORLD」／小山貴大「Je vous en prie」
○澤本徳美賞
飯田ゆりあ「Lumière et Papier」
○金丸重嶺賞
堀美由紀「自然美－夏－」／酒井成美「Mimēsis」
西村 満「今の自分」
○芸術学部奨励賞
栗原小織「太陽 Ⅰ 風の知覚 Ⅱ キジムナー」

◉オリジナルプリント展開催

写真学科のオリジナルプリントコレクションの中から、優れた黒白の写真作品を展示するオリジナルプリント展「銀塩黒白ファインプリントの名作」が、東京写真月間2012の協賛展として5月22日～6月22日まで江古田校舎芸術資料館において開催されます。

◉冠講座「アマナプロフェッショナル講座」開講

広告ビジュアル制作大手・アマナホールディングス及び関連会社による新規冠講座を4月から開講（前期）します。
プロフェッショナルのクリエイターを毎回お招きし、現場実務を事例に講義いただきます。《他学科公開科目》

映画学科

◉渋谷の映画館で学生が「映画祭1968」を企画

映画学科理論・評論コース3年生の授業の一環として、映画祭を初めて企画しました。オーディトリウム渋谷で1月28日から2月3日まで行い、テーマ選びから作品の選定と交渉、チラシ作りと配布、チケット販売、トークショーの交渉、会場運営などすべてを学生が手分けして行いました。朝日新聞に大きく取り上げられたこともあり、合計で1,600人を超す観客が詰めかけて成功に終わりました。

○第11回 特ラ連（特定ラジオマイク利用者連盟）功績賞の学生部門で、平成22年度［映画演出Ⅲ 映画技術Ⅲ］実習作品、HDドラマ「落日」でルロー・ロックトマ賢策さん（録音専攻）が奨励賞を受賞しました。
○第1回アジアシナリオコンペ シナリオ部門において知念真理奈さん（脚本2年）がグランプリを受賞しました。
○日本芸術センター第3回映像グランプリにおいて、映画学科平成22年度卒業計画 映像制作作品『祖母』（三浦 渉さん）が特別賞を受賞しました。
○3月17日、18日の両日に映像コース3・4年生有志による作品上映会が開催されました。平成22年度の卒業計画と映像Ⅲの授業内で制作されたアニメーション、ビデオ・アート、ドキュメンタリー、ドラマなど様々な作品が上映されました。
○平成23年度卒業制作（監督、撮影・録音、演技）は、16mmフィルム作品6本、HD作品29本の計35本が制作されました。これらの作品は、「映画演出Ⅲ、映画技術Ⅲ」の作品と併せて「Focus In 2012」（6月中旬頃開催予定）で上映されます。
○「映画演出Ⅲ」「映画技術Ⅲ」課題作品、「映像Ⅲ」課題制作作品、「卒業計画」映像制作作品、「卒業制作」作品が、J:COMMUNITYのJ:COMチャンネルにて放映されます。

美術学科

◉各種展覧会のお知らせ

○「ささてん」2人展（酒井みのり（院1年）・佐野友美）
4月3日～8日　12:00～19:00（最終日17:00）
SAKuRA GALLERY　月曜休廊
○掛井五郎・鞍掛純一の空間（鞍掛純一教授）
4月7日～22日　10:00～18:30（水曜定休）
Plaza Gallery
○298人展（冨井大裕助教）
5月2日～6日　名古屋市民ギャラリー矢田
9:30（初日13:00）～19:00（最終日17:00）
○笹井祐子個展（笹井祐子准教授）
5月　色彩美術館
○アウトレンジ2012
冨井大裕（助教）・峰村峻介（H24卒）・倉岡良太（院2年）
6月6日～19日　文房堂ギャラリー
○内山翔二郎展（内山翔二郎助手）
6月30日～7月22日　10:00～18:30（水曜定休）
Plaza Gallery

音楽学科

◉演奏会のお知らせ

○平成23年度卒業論文要旨発表会
3月21日　14:00～　江古田校舎音楽小ホール
音楽教育：坂本えみ、青野明香、戸部愛未、松田優一
情報音楽：田村華生、曽根啓太朗、佐藤直哉、中野翔三
○平成23年度卒業演奏会
3月21日　18:00～　練馬文化センター小ホール
ピアノ独奏：黒田 恵、里村亮祐、渋谷ひかり、菊池亮太、金田夢子
弦管打楽独奏：鈴木翔大、大和田仁美、藤原沙織、山之内美和、石井達也、山中一茂、菊川 暁
声楽独唱：磯野 恵、佐藤 圭、松田麻枝、菊田杏奈
○日本ピアノ調律師協会　第13回新人演奏会
4月29日　17:00～　東京文化会館小ホール　黒田 恵
○第82回読売新人演奏会
5月3日・4日　東京文化会館大ホール
ヴァイオリン独奏：山之内美和（ピアノ伴奏：菊池亮太）
フルート独奏：藤原沙織（ピアノ伴奏：里村亮祐）
ピアノ独奏：黒田 恵
テノール独唱：佐藤 圭（ピアノ伴奏：金田夢子）
○ヤマハ管楽器新人演奏会
開演時間未定　ヤマハホール
5月24日　第16回木管楽器部門
サックス独奏：大和田仁美
5月25日　第28回金管楽器部門
トランペット独奏：鈴木翔大
○ムラマツフルートデビューリサイタル
日時未定　藤原沙織

文芸学科

◉第10回江古田文学賞発表

第10回「江古田文学賞」は、平成23年8月31日に応募を締め切り、114篇の作品が集まりました。その中から11篇が予選を通過し、10月15日、江古田校舎にて行われた選考会にて「犬小屋」「へびとむらい」「俺とマッ缶の行方」の3篇が最終候補作となり、選考の末、杉山知紗さん（2年）の「へびとむらい」が第10回江古田文学賞に選出されました。

◉稲葉真弓教授の『半島へ』が谷崎潤一郎賞を受賞

稲葉真弓教授の『半島へ』（講談社刊）が、第47回谷崎潤一郎賞（中央公論新社主催）を受賞しました。

◉中野沙羅さんが第28回織田作之助青春賞佳作受賞

第28回織田作之助青春賞が1月6日に発表され、中野沙羅さん（3年）が「フリーク」で織田作之助青春賞佳作を受賞しました。受賞作は、毎日新聞社のホームページに掲載されています。

◉卒業生の岩関昂道さん『ソラの星』刊行

岩関昂道さん（H20年度卒）の処女小説『ソラの星』が、1月25日にメディアワークス文庫から刊行されました。

演劇学科

新年度のスタートと同時に演劇学科の企画や実習発表が始まります。新入生を迎え、気持ちも新たに実習発表へ向けて取り組んでいます。
前期の実習発表公演は以下の予定です。

○舞台総合実習ⅢA【演劇】
6月8日～10日　江古田校舎北棟内
○舞台総合実習ⅢC【日舞】
7月7日　江古田校舎北棟内
○舞台総合実習ⅠA【演劇】
7月12日～14日　所沢校舎D棟実習室1
○舞台総合実習ⅠB【演劇】
8月2日～4日　所沢校舎D棟実習室1
○舞台総合実習VD【洋舞】
8月3日・4日　江古田校舎北棟内

現在演目は未定ですが、詳細は演劇学科ホームページにてご確認ください。http://www.art.nihon-u.ac.jp/theatre

放送学科

◉国際ドラマフェスティバル in EKODA開催

1月21日、江古田校舎東棟E-207教室にて、第4回国際ドラマフェスティバル in EKODAが開催されました。
これは、国際ドラマフェスティバル in TOKYO ドラマアウォードを受賞した制作者を招き、「世界に見せたいドラマ」への熱い想いを語っていただくもので、今回は、連続ドラマ優秀賞『モテキ』（テレビ東京）の大根 仁さん（監督・脚本）と連続ドラマグランプリ『フリーター、家を買う。』（フジテレビ）の橋本芙美プロデューサーを、それぞれ第2部と第3部のゲストにお招きしました。また、第1部では、「ドラマの国際化に向けて～日・中・韓のドラマ制作体制～」と題する重村 一さん（国際ドラマフェスティバル in Tokyo実行委員会エグゼクティブプロデューサー）の講演と質疑応答が行われました。

◉第24回ACC学生CMコンクールで入賞者2名

CMの質的向上と人材の育成を目的に、全国の学生を対象として実施されているACC学生CMコンクールのラジオ部門で、昨年を大きく上回る応募総数2,236作品の中から、内藤早紀さん（2年）が銀賞、清野拓哉さん（2年）が銅賞を獲得しました。入賞作品は、以下のURLでご覧になれます。
http://www.acc-cm.or.jp/festival/11gakusei/gakusei_result.html

◉放送学科卒業生が文化庁芸術祭大賞

織田真介さん（S55年卒）がプロデュースした『鉄になる日』（MBSラジオ）が、平成23年度文化庁芸術祭ラジオドラマ部門の大賞を受賞しました。
この作品は、小松左京の長編小説『日本アパッチ族』が原作で、鉄を食べる新しい人類が日本と戦争する物語。「映像化が困難な壮大な物語を音だけで描きラジオドラマの醍醐味と可能性を示した」ことが高く評価されました。

◉岩城浩幸先生が文化庁芸術祭優秀賞

放送報道論の岩城浩幸講師が番組統括を務めた『JNNルポルタージュ』「3.11大震災記者たちの眼差し」（TBS）が、平成平成23年度文化庁芸術祭テレビドキュメンタリー部門の優秀賞を受賞しました。
この作品は、JNN各局の記者が東日本大震災の被災地取材を振り返ったオムニバス形式のドキュメンタリー。未曾有の惨禍に動揺し葛藤しながらも記者としての使命を遂行しようとする思いが込められ、観る者に感銘を与えたとして高く評価されました。

デザイン学科

◉「オレンジリボン運動公式ポスターデザインコンテスト2011」で坂本実佳子さんが入選

NPO法人児童虐待防止全国ネットワークが募集したポスターコンテストで、応募総数485作品の中から坂本実佳子さん（CD4年）が、SBI子ども希望財団賞を受賞しました。『地域のちからで子どもたちの未来を守る』というキャッチコピーが財団の活動方針に合致していると評価されての受賞となりました。

◉ID研究室が協力した「わさび火災警報装置」の研究開発が「イグノーベル賞」を受賞

2011年のイグノーベル賞が発表され、「わさび火災警報装置」の企画・研究開発を行った香りマーケティング協会理事長の田島幸信さんはじめ6名の日本人が受賞しましたが、同装置の開発において、平成20年度にインダストリアルデザイン（ID）研究室の肥田不二夫教授、清水敏成講師、土田修研究所教授がデザインを担当しました。
同装置は火災報知器と連動し火災発生時に五感の一つである嗅覚を刺激して火災を知らせるもので、ID研究室ではユニバーサルデザインの一環としてデザイン開発で協力しました。現在、同装置は高齢福祉施設などに設置されはじめています。

◉「コミュニケーションデザイン展（CD展）」を開催

コミュニケーションデザインコースの2、3年生有志による標記展覧会が昨年11月29日～12月21日まで江古田校舎で開催され、授業課題として制作した作品が展示されました。

◉「プロと卵のエコデザイン展2011 エコ・カクメイ」でデザイン学科生が優秀賞と奨励賞を受賞

プロの工業デザイナーとデザイナーの卵である学生による標記のデザイン展が、12月1日～13日までリビングデザインセンター OZONEで開催され、安藤結衣さんと池上 響さんが優秀賞、大津理沙さんと川村千明さんが奨励賞を受賞しました（いずれもID3年）。

◉銀座・和光のウインドウディスプレイをデザイン学科生がデザイン

銀座通りの和光本館のウインドウに、生沼祐亮さん、後藤浩美さん、秋田 諒さん（いずれも3年）がデザインした『Sweet Trap』がバレンタインデーのディスプレイとして採用され、2月1日～14日まで同ウインドウに展示されました。

和光ウインドウディスプレイ「Sweet Trap」（撮影：田代衛司）

◉「2011年度日本大学芸術学部デザイン学科卒業制作選抜展・大学院造形芸術専攻修了展［デザイン］」を開催

恒例となっている卒業制作選抜展が2月19日～3月1日まで江古田校舎にて開催され、学部・大学院それぞれで取り組んだ研究の集大成として制作された作品が展観されました。また、同展覧会のオープニングにあわせ、2月19日にはデザイン学科及び旧美術学科デザインコースを卒業したOB・OGの皆さんと学生との交流会が同会場で盛大に開催され、作品や進路などについての意見交換や情報交流が活発に行われました。

◉デザイン学科助手及び技術員による展覧会「おはこ展」を開催

デザイン学科の助手と技術員が日頃の研究制作の成果を発表するための「おはこ展」が、3月19日～27日まで江古田校舎にて開催されました。

◉「博物画に情熱を注いだ画家 杉浦千里の原画展」のご案内

ウルトラマンや怪獣たちを愛し、博物画をライフワークとしていたひとりの天才画家、杉浦千里氏が亡くなって11年。デビュー作のウルトラマンUSAからウルトラマンゼアス、ウルトラマンシャドー、ウルトラマンコスモス、そして怪獣など、生前彼が描いた貴重な原画を集めた展覧会が下記の日程で開催されます。直感にはたらきかけるイラストレーションの密度とパワーから、作者の見る者への愛に満ちあふれたメッセージが伝わってきます。杉浦千里の神業とも言える仕事をご堪能ください。
4月6日～5月11日　10:00～20:00（最終日のみ17:00まで）
江古田校舎A&Dギャラリー（入館無料）

◉「life」開催のご案内

三宅里和さん、島田紅美さん、武田彩希さん、山本優果さん（いずれもCD3年）によるグループ展「life」が以下により開催され、平成作品の数々が展観されますのでご覧ください。
6月18日～28日　江古田校舎A&Dギャラリー（入館無料）

College Administration Office

【事務局からのお知らせ】

◉平成24年度授業日程

在学生（2年以上）ガイダンス	4月6日（金）7日（土）　於：両校舎
平成24年度入学式〈全日大〉	4月8日（日）　於：日本武道館
芸術学部入学歓迎式	4月8日（日）午後　於：江古田校舎
新入生ガイダンス	4月9日（月）10日（火）　於：江古田校舎
新入生歓迎クラブガイダンス	4月11日（水）午後　於：所沢校舎
定期健康診断	4月11日（水）12日（木）　於：両校舎
前期授業開始	4月13日（金）
臨時休校	5月1日（火）2日（水）
新入生歓迎行事	5月19日（土）（休講）　於：所沢校舎
前期補講期間	7月9日（月）～14日（土）

※補講の実施を必要としない科目については、休講とする。

中間試験・前期A試験	7月17日（火）～23日（月）〈授業内試験〉

※中間試験実施該当科目は外国語科目を主とする。なお、試験を実施しない科目は平常通り授業を行う。
※前期試験実施該当科目は前期のみで授業を終了する科目とする。なお、試験を実施しない科目及びB試験該当科目は平常通り授業を行う。

前期B試験	7月24日（火）～30日（月）

※所定の試験時間割にて試験を実施し、平常授業は行わない。

夏期休暇	7月31日（火）～9月19日（水）
前期追・再試験	9月20日（木）21日（金）

※前期追・再試験は前期終了科目の内、不合格となった卒業見込者のみを対象に行う。なお、平常授業は行わない。

後期授業開始	9月24日（月）

◉新入生に対するクラブ勧誘

○新入生歓迎クラブガイダンス
所沢校舎（教室棟11番教室）　4月11日（水）13:00～17:00
参加部会：32部会（文化部連盟15部会、運動部連盟14部会、他3部会）
○新入生勧誘期間

江古田校舎（宣伝チラシ配布）	4月8日（日）13:00～16:00
	4月9日（月）10:00～16:00
所沢校舎（机出し）	4月11日（水）～25日（水）10:40～16:00
	（公認団体11日～25日、未公認団体18日～25日）
所沢校舎（円形ステージ）	4月13日（金）～26日（木）12:10～13:00
	（公認団体13日～21日、未公認団体23日～26日）

◉平成23年度日本大学芸術学部奨学金第2種奨学生の決定について

平成23年度日本大学芸術学部奨学金第2種奨学生が次のとおり決定しましたので、お知らせします。
本奨学金は芸術・文化に係る創作活動において、専攻分野に関連した国際的又は全国的規模のコンクール・発表等で高い評価を受ける等、優秀な成績をあげたと認められる学部・大学院生に対し、給付される奨学金です。

【学部】
ルロー・ロックトマ賢策（映画・4）
特定ラジオマイク利用者連盟の主催による「第11回特定ラジオマイク利用者連盟功績賞」において学生部門で奨励賞を受賞
黒沼千春（代表者／文芸・4）、東山純一（写真・4）、園田力意、厚木拓郎、大杉磨耶、山下裕太（以上 映画・4）、赤坂風有子（美術・4）、並木孝博、坪田麻耶（以上 音楽・4）、福村豪馬（演劇・4）、福井裕子（放送・4）、坂 奈津子（デザイン・4）、植田倫世（映画・3）、青木友理（演劇・2）
芸術学部総合講座「広告企画実務」を通して、ACジャパン（旧・公共広告機構）主催の公共広告CM学生賞において準グランプリBS民放賞を受賞
※平成23年7月1日から、BS民放8社で1年間にわたり放映中
内藤早紀（放送・2）
（社）全日本シーエム放送連盟（ACC）の主催による「ACC学生CMコンクール」のラジオCM部門で銀賞（第3位）を受賞
【大学院】　該当者なし

（学年は23年度のもの）

編集後記

3月11日の東日本大震災から1年が過ぎたが、被災地の状況は今も厳しさを残している。被災地で先の見えない不安な日々を送っておられる方々に、どのような支援ができるかを考えさせられた1年でもあった。昨年11月に日芸で第22回東京音楽療法協会講習会が開催された。埼玉医科大学総合医療センターの儀賀理暁先生による講演「"あたり前"であること～被災者支援のあり方を考える～」では、支援の難しさ、何より「単発でなく継続する」ことの重要さが熱く語られた。そして「この冬が大切だ」ということも。
12月には、第43回日本芸術療法学会が「諸技法を横断する音楽性」をテーマに東京藝術大学で開催された。メインは作曲家の坂本龍一氏をゲストに招いた震災復興支援特別企画「いま試される芸術の力」である。坂本さんの語った「癒しって言葉が大嫌いです」のトーンが今も耳に残っている。それは芸術家としての誠意と真実であると解釈した。癒されたと思うのはその人自身の問題であり、芸術家は「人を癒そう」と思って芸術表現を行っているわけではない。ただ芸術療法や音楽療法では、芸術各領域の持つ特性を活かして、〈共に在る場所（フィールド）〉で起こる事実を丁寧に考えていくプロセス自体が、最も重要な営みであることも再認識した。日芸は創設100周年に向けて新たな芸術創出への一歩を踏み出した。

編集委員　土野研治

◉発行：日本大学芸術学部 ◉発行責任者：野田慶人
◉編集：広報委員会／委員長：佐藤洋二郎／副委員長：中町綾子／編集委員：浅井 譲／宮崎正弘／鞍掛純一／土野研治／青木敬士／丸茂祐佳／金 龍郎／長瀬浩明／松本 洸／ジュリアン・マニング／松村悦博／樋口 肇／秋山和則／鈴木俊崇 ◉ACロゴデザイン：中島安貴輝 ◉デザイン：井原靖章デザイン ◉印刷：(株)タスプ／箭内民生　発行2012.4